

イチゴ高設栽培（大分方式）における施肥法

大分県におけるイチゴ高設栽培の面積は、13 年度末で約 30ha に達し、大分方式は其中で 14.4ha を占めている。大分方式の特徴として、杉バークのみを培地に使用、肥料は元肥主体の置き肥、という栽培法の簡便さがある。

これまで、施肥法は 4 月までの栽培を目的とした場合、被覆肥料ロング 140 日（リニア型）を株当たり N 成分で 4 g 施用する方法を採用してきたが、定植後の高温で肥料溶出が促進されることによる第 2 花房分化の遅れ、杉バークに肥料成分が少ないことによる微量要素の不足等の問題が現地で起こっている。そこで、施用後 35～45 日の肥料溶出を抑えたスーパーロング 140 日（シグモイド型）、微量要素を含んだロングトータル 140 日（リニア型）の施用について検討した（第 1 表）。品種は「とよのか」を用い、作型は夜冷短日処理による早出し促成作型とした。株間 23cm とし、肥料はそれぞれ株当たり N 成分で 4 g 施用した。

第1表 各種肥料の含有成分(%)

肥料名	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	Mn	B
ロング	14.0	12.0	14.0			
スーパーロング	14.0	12.0	14.0			
ロングトータル	13.0	11.0	13.0	2.0	0.1	0.06

* ロング 140 日、ロングトータル 140 日はリニア型（施用後徐々に溶出）
スーパーロング 140 日はシグモイド型（施用後 35～45 日の溶出抑制）

【生育および出蕾への影響】

年内の生育は、ロング、ロングトータル区が優れ、スーパーロング区は劣った。それ以降の生育は、明らかな差がなかった。頂花房の出蕾は、ロング、ロングトータル区が 10 月 10 日と早く、スーパーロング区は 10 月 15 日と遅れた。第 2 花房の出蕾は、ロングトータル区、ロング区、スーパーロング区の順であり、ロングトータル区の第 2 花房分化が早かった（第 2 表）。

第2表 肥料の種類が出蕾へ及ぼす影響

	頂花房出蕾日	第 2 花房出蕾日
ロング	10 月 10 日	12 月 19 日
スーパーロング	10 月 15 日	12 月 25 日
ロングトータル	10 月 10 日	12 月 11 日

【商品果収量への影響】

年内および 2 月までの商品果収量では、ロング、ロングトータル区が同程度であり、スーパーロング区はやや低かった。また 4 月までの商品果収量では、ロングトータル区が 397kg/a で最も多収であり、ロング、スーパーロング区は約 350kg/a で同程度であった。ロングトータル区は 1 果重の増加により増収し、スーパーロング区は収穫果数が少ないことから低収となったと考えられた（第 3 表）。

第3表 肥料の種類と商品果収量、平均果重、果数

肥料名	商品果収量 (kg/a)				平均果重 (g)	果数 (果/株)
	年内	1 - 2 月	3 - 4 月	合計		
ロング	125	73	158	356	13.6	36.1
スーパーロング	106	67	175	348	16.1	29.8
ロングトータル	118	84	195	397	15.0	36.5

以上のことから、大分方式の高設栽培では微量要素を含んだロングトータル 140 日（リニア型）の使用により、収量の増加が期待できる。なお、「さちのか」を用いた試験でもロングトータル施用による増収効果が認められている。（野菜部）